

## 平成22年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

被評価にともなう印象形成時の脳活動

学位の種類: 修士(学術学)

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 フロンティアヘルスサイエンス系

学修番号 08898602

氏名: 江波 義信

(指導教員名: 菊池 吉晃 教授)

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式1枚 (A4版) に収めること

本研究では、印象形成過程を1対1のコミュニケーションにおける評価をともなう情報伝達としてとらえ、他者から評価を受ける際に相手に対して抱く印象に関連する神経基盤についてfMRIを用いて検討を行った。20歳から23歳の健康な男子学生13名を被験者として、学校・職場などで用いられるPositive、NegativeまたNeutralな評価をともなう日常語を見知らぬ他者の顔画像とともに提示し、fMRIによる撮像を行った。撮像後に再度刺激を提示し、対象人物に関する「印象の良し悪し」、「印象の強さ」、「共感度」について評定を行った。主観評価の結果は、印象の良し悪しと共感度で、Positive-Negative、またNeutral-Negative間で有意な差が見られた。また、印象の良し悪しと共感度の間に中程度の相関がみられた。fMRIの結果は、Neutralに対するPositive条件で、視覚野の活動の促進と、前頭前野内側部領域の賦活が見られた。これらは、良い評価を行った相手の顔をより詳細に認識しようとしていること、また、自己に関連する領野の活性化を示している。一方、Negative条件では、左右両半球の腹外側前頭前野に賦活が見られた。この領域は感情の再評価に関連しており、悪い評価に対して情動を沈静化している状態を示しており、他者からの悪い評価に対して自身と無関係なものとして処理していると考えられる。さらに、主観評価の結果から「印象の良し悪し」に対応する脳活動について検討を行い、印象が「中間」に対する「良い」条件において、右半球の頭頂弁蓋部内側の二次体性感覚野～島・後部、島・前部、背側前帯状回の賦活を確認した。これらは、身体の内受容感覚と情動をともなう認知に関連する部位で、「ペイン・マトリックス」領域の一部として知られているが、他者の良い印象に関連して賦活する事例はこれまで報告されていない。これらの脳部位の活動は、印象が「中間」に対する「悪い」条件では検出されなかった。以上の結果は、見知らぬ他者からの評価に対して、まず自身の身体感覚として「受容」した後に、自己の情動と関連する意識的な処理を行うことによって、相手に対する良い印象が形成されることを示しており、右半球の島から背側前帯状回にかけての活動が事後の相手の良い印象を予測する可能性を示唆している。